



## 後深草院二条(続7) [四条隆親編]

～日記文学『とはずがたり』の作者～

岡崎 嘉彦



(前回のあらすじ)

亀山院との小弓の勝負に再び後深草院が負けると、今度はその趣向として『源氏物語』の六条院の女楽が模される事になる。二条は人間関係の不穏な雰囲気予測して参加をためらうのだが、後深草院から明石の君の役を命じられることになる。しかし、二条は他の女房たちよりも格下の明石の役を与えられたことでこの女楽に参加することにますます気が進まなかった。

今回の趣向のための練習が行われると、女御の君の役は西の御方となり、紫の上の役を務める東の御方とお並びになる。二条は対座に置かれた畳の、右の上の席に着くことになる。これは後深草院からの仰せであった。新参の女房である四条隆親の孫は女三宮の役のため一畳上に座るのではないかとは思ったものの、院の仰せであるため、二条は会場である伏見の御所へとお供して参ることになる。そこではすでに酒宴が始まり、後深草院は源氏の六条院、亀山院は夕霧の大將となる。まず、それぞれの女房の座を用意して並んで座った。

するとそこへ、隆親がやってきて女房の座を見始める。そして、「このやり方は悪い。女三宮の席は文台の御前である。私の最愛の孫は二条よりも上座に座るべきだ。座り直せ、座り直せ」と執拗に言い始める。そこへ、善勝寺隆顕と西園寺実兼が来て、「これは、院の特別の仰せでございます」といったが、二条は隆親に強引に座を降ろされることとなってしまう。このため二条は怒りを抑えながら、こんな事に参加しても仕方がないと思ひ席を立った。そして、局へそっと降りて「院のお尋ねがあったらこの手紙を差し上げなさい」と言い置き、この場を離れて即成院の近くの庵へと訪ねていく。

今回登場する善勝寺隆顕とは、四条隆親の次男で嫡子。父隆親とは不仲であり、結局、建治二年に権大納言を辞して出家する。隆顕の系統は後に南朝に与し絶家となる。

即成院とは、現在の京都市東山区にある真言宗の寺院で、泉涌寺の塔頭である。

今回の出来事では気の強い二条に対して、同様の性格の隆親との間での壮絶なやりとりの様子が記されている。隆親にとって、老いからくる焦りからなのか、強引に新参女房の孫娘に肩入れをしてくる。院から仰せがあるにも拘わらず、隆親は孫娘への可愛さも手伝って二条への対抗心をむき出しにする。

このような公の場での屈辱に耐えかねた二条は自ら席を立ち、院に宛てた手紙を書くと潔く御所を退出する。彼女は自身の尊厳を大きく傷つけられても、心は隆親に正面から立ち向かっていた。そして、気の強さを心中に留めながら冷静でしなやかなふるまいに終始する。苦しい中でも彼女は自身の正しさを無言で強く訴えようとしていたのだ。但し、これは二条の一方的な言い分が描かれているものかも知れない。だが同時に、その心の中には大きな寂しさもあることを感じざるを得ない。このように、彼女が隆親によって露骨に傷つけられながらも、潔く振舞う姿には我が儘な一面とは別に人物の大きさはもとより、魅力さえ感じるのである。

### ■主な参考文献、そして、今回おすすめする本。

- 『とはずがたり』[後深草院二条著]；三角洋一校注『たまきはる』[建春門院中納言著]；三角洋一校注 岩波書店 新日本古典文学大系；50 1994年。

おかざき よしひこ (司書・情報サービス課)